高松市埋蔵文化財調査報告 第 180 集

都市計画道路朝日町仏生山線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第１冊

多肥平塚遺跡

２０１７年３月

高松市教育委員会

例言

1　本報告書は高松市都市計画道路朝日町仏生山線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、高松市多肥上町に所在する多肥平塚遺跡（たひひらつかいせき）に関する報告である。

2　発掘調査地及び調査期間は、次のとおりである。
調査地：　高松市多肥上町
発掘調査：平成２８年６月１４日～平成２８年７月２７日
整理作業：平成２８年１０月１日～平成２９年３月３１日

3　発掘調査及び整理作業は、高松市教育委員会が実施した。ただし、地方自治法第 180 条の７に基づく補助執行により、高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員　渡邊誠、香川将慶が担当した。

4　本報告書の執筆及び編集は、香川が担当した。

5　本報告書掲載の遺物写真撮影は、西大寺フォトに委託した。

6　本書の挿図として、国土地理院発行２万５千分の１の地形図「高松南部」を一部改変して使用した。

7　本報告のうち標高値を示したものは海抜高を表し、方位は座標（世界測地系）の北を示す。

8　本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
ＳＤ：溝跡　ＳＫ：土坑　Ｐ：ピット

9　発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会が保管している。

本 文 目 次

第１章　調査の経緯と経過 ･･1
　第１節　調査の経緯 ･･1
　第２節　発掘調査・整理作業の経過 ･･････････････････････････････････････1
第２章　地理的・歴史的環境 ･･2
　第１節　地理的環境 ･･2
　第２節　歴史的環境 ･･2
第３章　調査の成果 ･･4
　第１節　調査地の概要と基本層序 ･･4
　第２節　遺構 ･･4
　第３節　遺物 ･･10
第４章　まとめ ･･11
写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図 ･･････････････････････････1
第２図　周辺遺跡地図 ･･････････････････････････3
第３図　遺構平面図 ･･････････････････････････5
第４図　東西基本土層図 ･･････････････････････6
第５図　南北基本土層図 ･･････････････････････7
第６図　SD－1･SK－1･SK－2 平・断面 ･･････････8
第７図　SK－3･SK－4･SP－1 平・断面図 ･･････････9
第８図　遺物実測図 ･･････････････････････････10

挿　表　目　次

第１表　出土遺物観察表 ･･10

写 真 図 版 目 次

図版 1-1　基本土層東西面（南から）
　　2　SD-1　土層断面（南から）
　　3　SD-1　完掘状況（南から）
　　4　SK-1　土層断面（北から）
　　5　SK-1　完掘状況（南から）
　　6　調査区全景　　（南から）
　　7　噴礫確認状況　（南から）
　　8　出土遺物

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

平成２７年度に当該地において、高松市（道路整備課）が都市計画道路朝日町仏生山線整備事業を実施するにあたり、高松市教育委員会（補助執行により高松市文化財課）に埋蔵文化財包蔵地の照会があった。当該地は、当初、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、「多肥平塚遺跡」に近接することから、埋蔵文化財の包蔵状況を確認するため、平成２８年３月２２日から３月２４日の期間に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、当該地で埋蔵文化財の包蔵状況を確認したことから、近接する「多肥平塚遺跡」の一部と判断し、埋蔵文化財包蔵地の範囲変更を行うとともに、事業実施に当たっては埋蔵文化財の保護が必要である旨を伝えた。

高松市から６月９日付けで文化財保護法第９４条第１項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が高松市教育委員会（以下、市教委）に提出された。その通知を香川県教育委員会に進達したところ、香川県教育委員会から２８年６月１３日付けで事前の発掘調査を実施する旨の行政指導があったため、高松市と協議した結果、市教委を主体に発掘調査を実施することになった。

第２節　発掘調査・整理作業の経過

上記の経緯によって、下記の範囲（図１）を発掘調査することになった。平成２８年６月１４日より重機掘削を開始し、７月２７日に事務所を撤去し現地調査を終了した。調査の経過は下記の調査日誌のとおりである。

調査区の設定は既存のコンクリート畦畔を境にＡ区及びＢ区とした。

調査日誌

６月１３日（月）　事務所設置。
６月１４日（火）　重機掘削、遺構確認。
６月１６日（木）　基準点設置。
６月１７日（金）　重機掘削終了。
６月２０日（月）　遺構掘削開始。
６月２３日（木）　現場水没。
７月１２日（火）　遺構全体図作成開始、基本土層図の作成。
７月２０日（水）　遺跡全景写真撮影。
７月２１日（木）　埋戻し開始。
７月２６日（火）　埋戻し終了。
７月２７日（水）　事務所撤収、現場終了。

第１図　　調査地位置図

整理作業は１０月１日より遺物の洗浄、実測及び図面のトレースを行い、１１月１日より執筆及び編集作業に取り掛かり、平成２９年３月３１日に報告書の刊行をもって完了した。

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

高松市は香川県の中央やや東寄りに位置し、市域の大部分は讃岐平野の一部を形成する高松平野が広がっている。南部に讃岐山脈の北縁がかかり、東部に屋島、立石山塊、浄願寺山、西部に青峰、堂山の山系が連なり、石清尾山が平野中央部に存在する。いずれも約１４００万年前の火山活動によって噴出した溶岩が侵食されたメサ、あるいはビュート型の溶岩台地で、20 ～ 300m の低い山地である。北方は瀬戸内海に面し、男木島、女木島、大槌島、小槌島等の島々も市域に含み、備讃瀬戸を挟んで岡山県と対峙する。

多肥平塚遺跡が立地する高松平野の微地形や形成過程については、高橋学氏により詳細な分析がされている（高橋 1992）。高松平野は、大局的に周縁部から山地域 － 丘陵域 － 平野域の順に地形を分類することが可能であるとされる。ただし、平野中央部や北端の海岸部付近にも石清尾山塊や屋島等、複数みられる。詳細にみると、山地・丘陵地縁辺部に更新世の川床低下により形成された段丘面がみられ、さらに海浜部に向かって、三角州帯や自然堤防帯などの沖積面が広がる。一般的に沖積平野の形成過程は山地・丘陵地から沖積面へと移行する部分に扇状地帯が、海浜部近くに三角州帯が形成され、その中間に自然堤防帯が形成される。しかし、高松平野をはじめとする瀬戸内海地域の多くの平野部は、山から海までの距離が短く、河川規模が小さいことから、扇状地帯の上に自然堤防帯が重複する現象がみられると指摘されている。

完新世地形である沖積面についてみると、その変遷過程が読み取れる。沖積面は当初、高松平野を流れる香東川などの主要な河川の本流から細かく枝分かれした複数の自然流路の埋没が進んだ低地帯、自然堤防をはじめとした微高地等の存在により、比較的起伏にとんだ地形面を呈していたことが、微地形分析や既往の発掘調査等により明らかになっている。

多肥平塚遺跡の周辺の地形は南から北へ若干傾斜する平地に立地する。所々に自然堤防と推定される微高地が見られる存在、農業用水を確保するため数多くのため池が存在し、出水（ですい）と呼ばれる自噴地下水脈が確認されている。調査地周辺では、栗木出水、平井出水、鈴木出水などが見られる。調査区内でも出水と考えられる噴出地を確認した。

第２節　歴史的環境

高松平野における遺跡の様子は、大規模な開発事業（高松東道路建設事業、空港跡地開発事業等）等に伴う事前調査により､解明されつつある。今回の調査地である多肥上町周辺も香川県立高松桜井高等学校の建設（多肥松林遺跡）や都市計画道路の建設（多肥松林遺跡、多肥宮尻遺跡等）に伴う事前調査が行われ、埋蔵文化財の包蔵状況を知ることができた。

周辺地域の遺跡ついては以下のとおりである。

多肥北原遺跡では７世紀～奈良時代頃の竪穴建物跡及び掘立柱建物跡が検出された。緑釉陶器や灰釉陶器が出土し、近くに比定される多肥廃寺との関わりも指摘されている。

太田原高洲遺跡では弥生時代中期後葉の区画墓７基を確認し、同時期の墓域構成が分かる香川県内初めての事例である。主体部からは水晶製算盤玉７点が出土し、丹後半島周辺で製作されたものが持ち込まれた可能性がある。

多肥松林遺跡はこれまで複数個所で発掘調査が実施され、特に高松桜井高等学校建設に伴う発掘調査では大規模な調査が行われ、多くの成果が得られている弥生時代から近世にかけての集落遺跡である。弥生時代には竪穴建物跡や掘立柱建物跡、溝跡、旧河道が確認された。弥生土器をはじめ、分銅形土製品、農耕具や銅剣形といった木器が出土している。古墳時代から平安時代に竪穴建物跡、掘立柱建物跡が確認された。須恵器や土師器等の土器類に、墨書土器、風字硯、祭祀に使用したと考えられる斎串が出土している。

松林遺跡は縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡である。この遺跡の特徴として弥生時代中期ごろに発生した地震と考えられる噴礫が確認された。この噴礫には供献土器と考えられる土器が置かれ、「大地を治める」、「災害の供養」等の呪術的なものと考えられる。

1　多肥平塚遺跡　2　松林遺跡　3　多肥松林遺跡　4　日暮・松林遺跡　5　多肥宮尻遺跡　6　宮西・一角遺跡　7　一角遺跡
8　空港跡地遺跡　9　上林・本村遺跡　10　拝師廃寺　11　弘福寺領田図南地区比定地　12　上林城跡　13　野郷遺跡　14　高木城跡
15　出口遺跡　16　井手上・中所遺跡　17　多肥廃寺　18　多肥北原遺跡　19　多肥北原西遺跡　20　太田原高州遺跡　21　大下遺跡
22　上東原遺跡　23　鹿角城跡　24　太田城跡　25　上天神遺跡　26　太田下・須川遺跡　27　佐藤城跡　28　キモンドー遺跡
29　汲仏遺跡　30　多肥下町下所遺跡　31　凹原遺跡　32　天満宮古墳　33　彦作遺跡　34　加摩羅神社古墳　35　横内東遺跡
36　平石上古墳群　37　瘤山 (小日山)1 号墳　38　瘤山 (小日山)2 号墳　39　日山山頂経塚・古墳 40　北山古墳群　41　雨山山頂古墳
42　雨山南古墳群　43　住蓮寺池古墳　44　百相城跡　45　城墟遺跡　46　萩前・一本木遺跡　47　百相廃寺　48　野上遺跡
49　百相坂遺跡　50　船岡山古墳　51　旧南海道跡　52　池の内遺跡 I　53　池の内遺跡 II　54　お茶荒神　55　畑遺跡
56　雨山南遺跡

第２図　　周辺遺跡地図

第３章　調査の成果

第１節　調査地の概要と基本層序

当該地の調査前の状況は水田であり、北側には引き続き水田が広がり、南側は県道太田上町志度線が建設中である。調査区周辺は南西方向に向かい標高が高くなり、周辺には自然堤防の名残と思われる高まりが確認できる。今回の調査区はコンクリート畦畔を挟んで北側をＡ区、南側をＢ区とした。

調査の結果、溝１条、土坑４基、ピット９基を確認した。調査区全体では、遺構の密度は希薄でＡ区の北側とＢ区の東側に遺構が集中する。調査区は現代の攪乱による破壊や礫層帯が広がる。出土遺物は遺構から出土したものはなく、遺構検出時に出土したものがほとんどである。

基本層序はＡ区北壁とＡ区からＢ区にかけての東壁によって確認した。基本土層（第４・５図）は現代の耕作土（1 層）及び床土（2a 層～ 2c 層）の下に暗灰黄色粘質シルト質を中心とした近世以降の遺構面（3a 層～ 3i 層）を確認した。その下層から古代以前と考えられる褐灰色粘質シルト層（4a 層）と黒褐色粘質シルト層（4b 層）が確認された。遺構は４層よりも下面で確認し、この層から高台付坏（第８図－２）が出土している。Ａ区中央及び東端では、出水と考えられる噴出地点が確認された。また、東西基本土層に地震によるものと考えられる噴礫層を確認した（Ａ層）。

さらに、その下層は黄褐色粘質シルト層（5 層）と黄灰色砂礫層（6 層）が確認され地山と考えられる。北側の限られた範囲でシルト層の地山を確認しており、北側に広がるものと推測される。Ａ区の南半分より南側では礫層が広がっている。

第２節　遺構

SD-1（第６図）

Ａ区北東側で検出した。遺構の規模は全長約 4.5 m×幅約 40㎝、深さ約 20㎝である。遺構の堆積土は暗褐色シルト質層一層である。北側は攪乱により不明だが、さらに延びるものと考えられる。遺構から遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SK-1（第６図）

Ａ区北東で、SD-1 の東側で検出した。遺構の規模は東西約 60cm ×南北約 30cm、深さ 10cm である。遺構の堆積土は黒褐色砂質土の単層である。この遺構は SD-1 を検出した黒褐色土層より下面の黄灰色土を地山とした堆積層で確認しており、SD-1 より古い時期のものと考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SK-2（第６図）

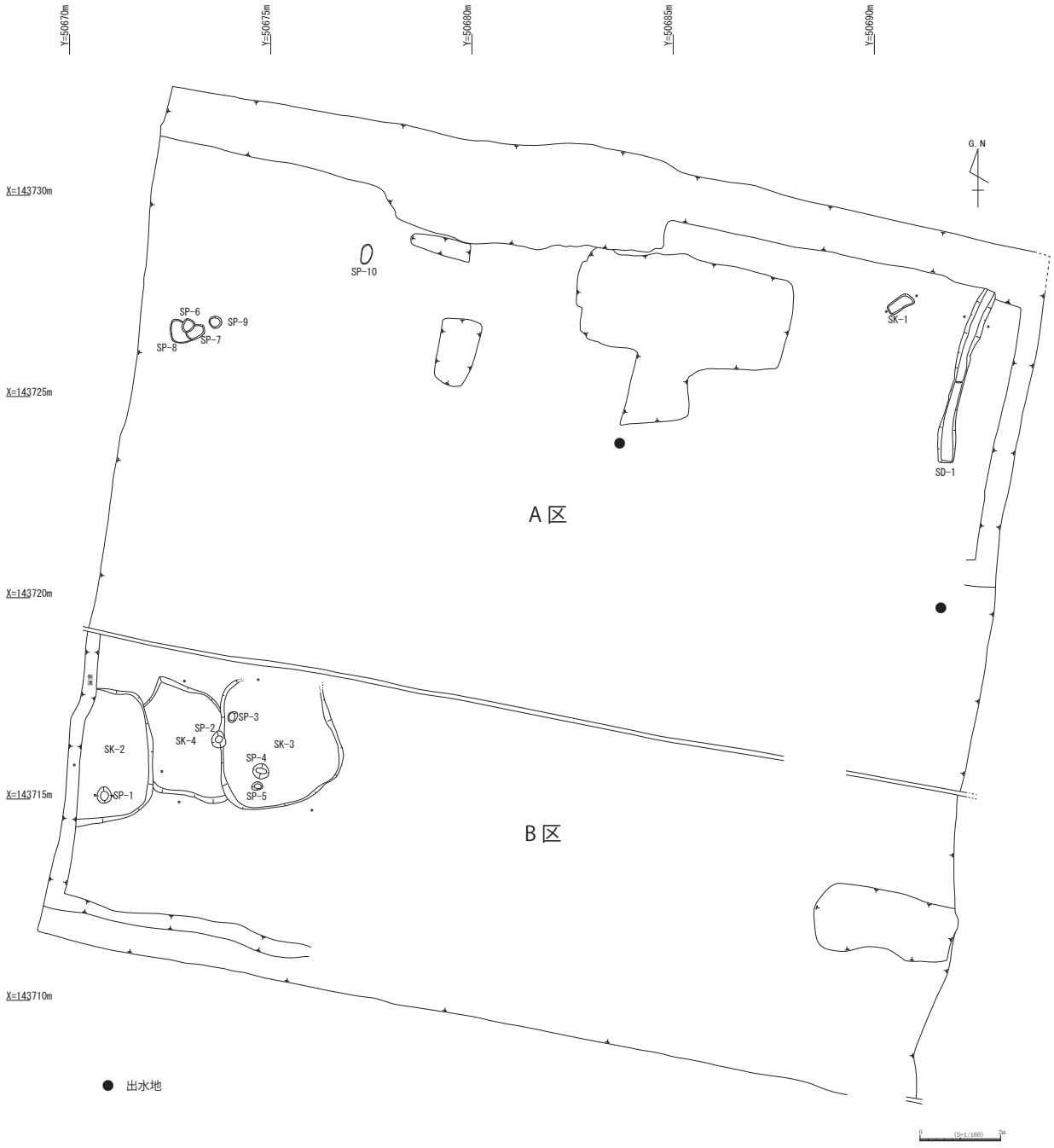
Ｂ区西側で検出した。遺構の規模は東西約 3m ×南北約 6m20cm、深さ 20cm である。遺構の西側は調査区外のため不明である。遺構上面で SP-1 を確認し、SK-4 を切っている。遺構の堆積土は褐灰色砂質土の単層である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SK-3（第７図）

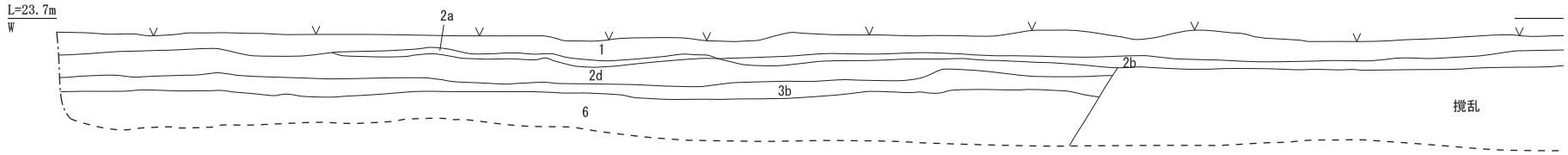
Ｂ区西側で検出した。遺構の規模は東西約 5m ×南北約 5m20cm、深さ約 10cm である。遺構の北側は畦畔によって破壊されている。遺構上面で SP-2.3.4.5 を確認した。遺構の堆積土は暗赤褐色砂質土の単層である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

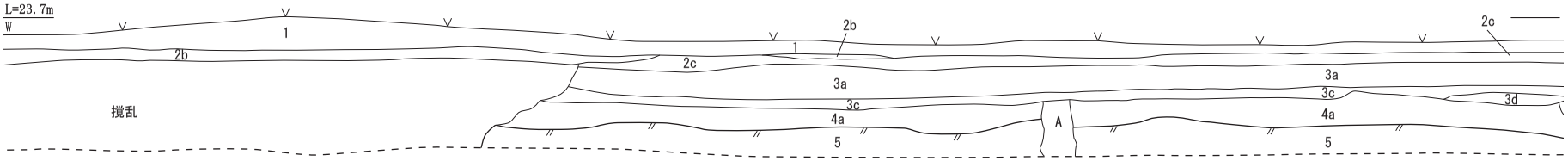
SP-1（第７図）

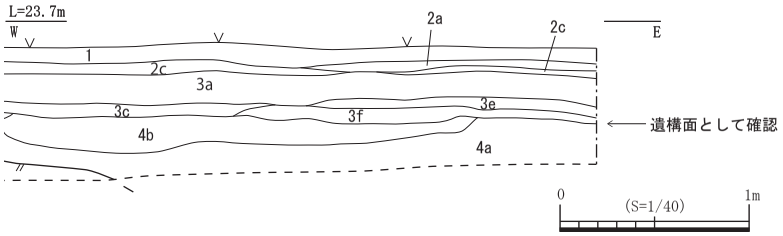
Ｂ区西側で検出した。遺構の規模は直径 40cm、深さ約 10cm である。SK-1 を切っている。遺構の堆積土は黒褐色砂質土の単層である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第３図　　遺構平面図（1/１６０）

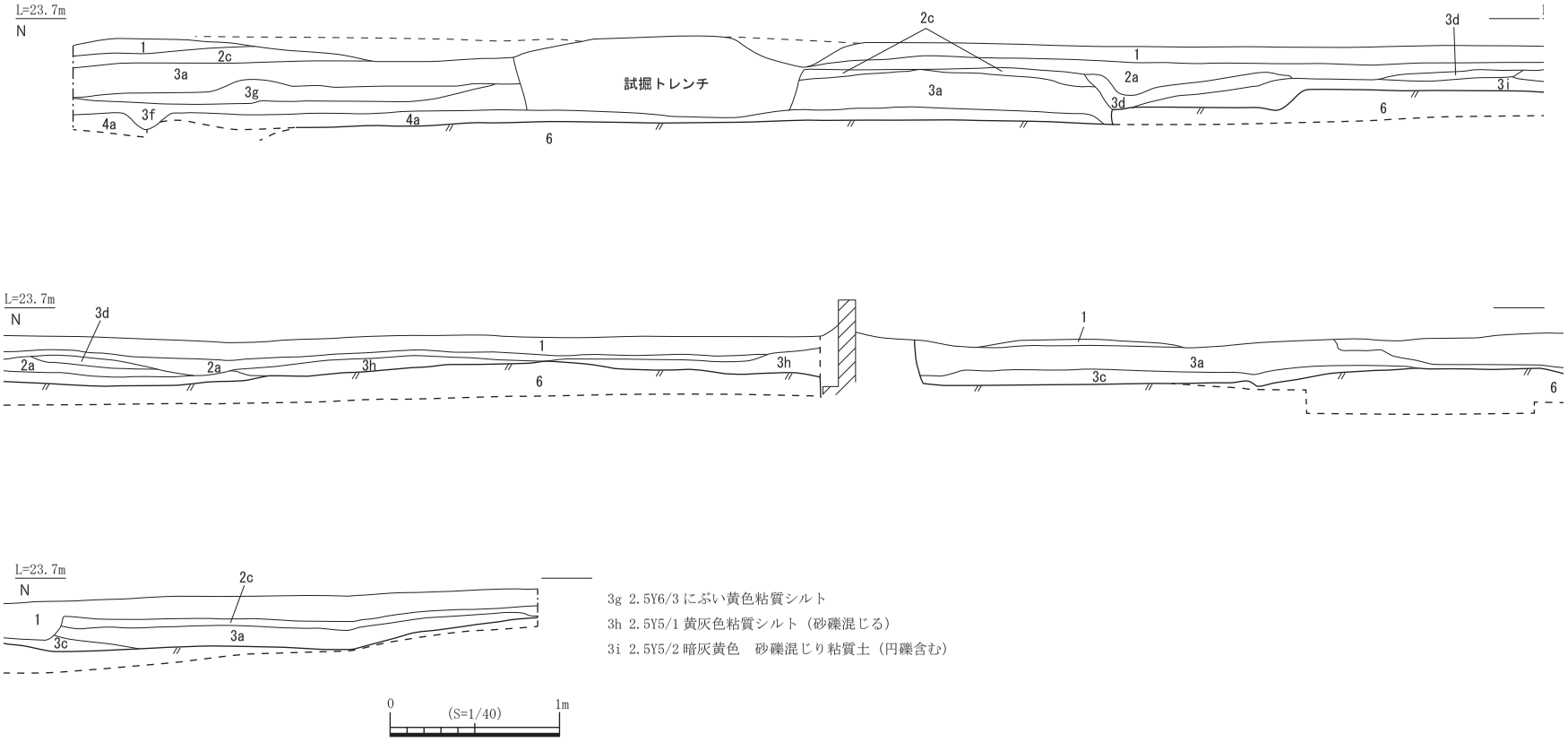






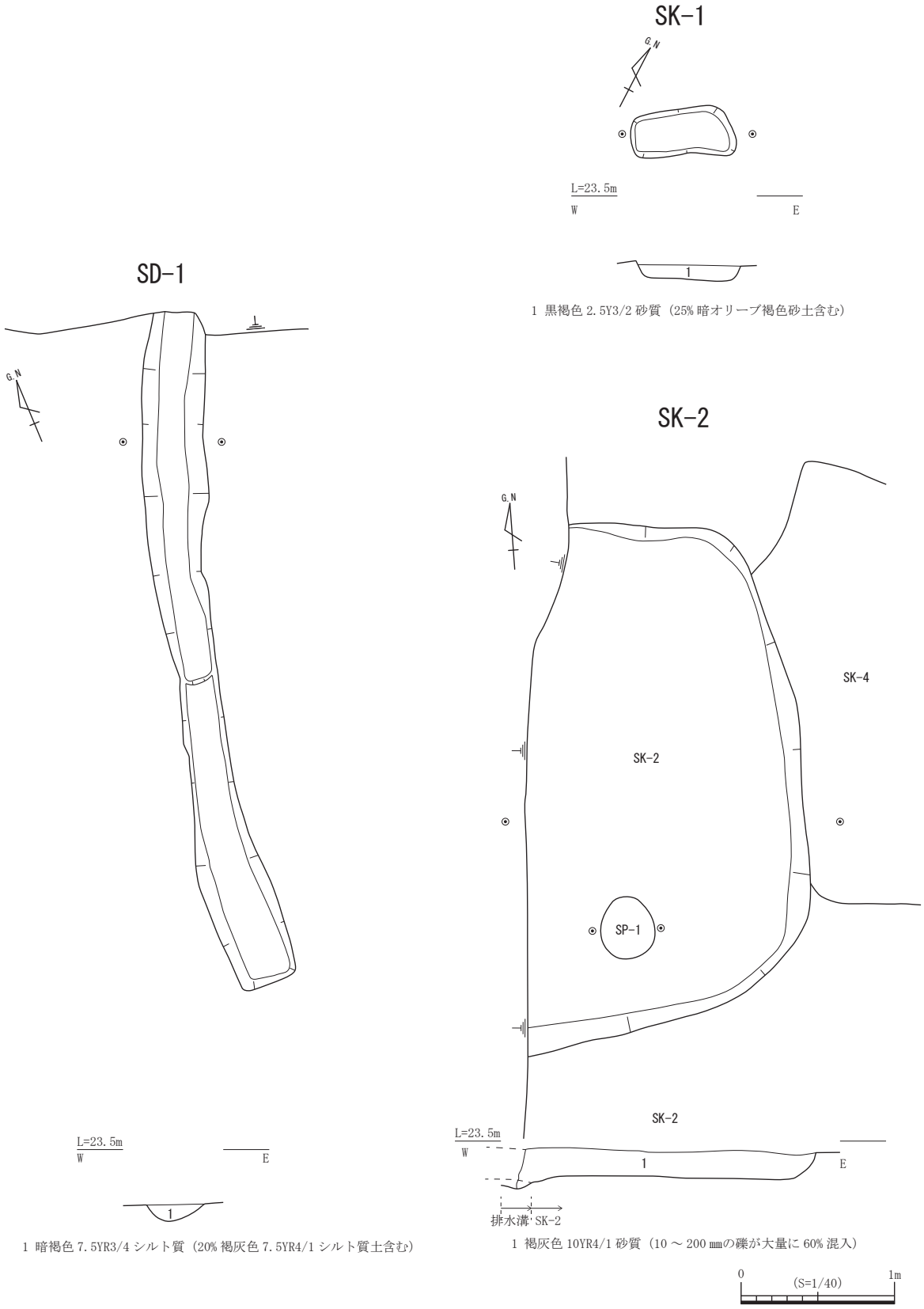
1　甘土
2a 2.5Y6/2 灰黄色砂礫土（床土 a）
2b 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト（床土 b）
2c 2.5Y7/1 灰白色粘質シルト（床土 c）
2d 2.5Y3/2 黒褐色砂礫土　（床土 d　3b 層のブロックを多量に含む）
3a 近世床土？　2.5Y6/9 にぶい黄色粘質シルト
3b 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト（褐鉄鉱を多量に含む）
3c 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト（褐鉄鉱を多量に含む）
3d 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト（褐鉄鉱を多量に含む　円礫含む）
3e 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト
3f 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト
4a 7.5YR4/1 褐灰色粘質シルト
4b 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト（遺構か？　円礫を多量に含む）
5　2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト（地山①）
6　2.5Y4/1 黄灰色砂礫（地山②　円礫を多量に含む）
A　7.5YR4/1 褐灰色粘質シルト（噴礫層）

第４図　　東西基本土層図（1/４０）

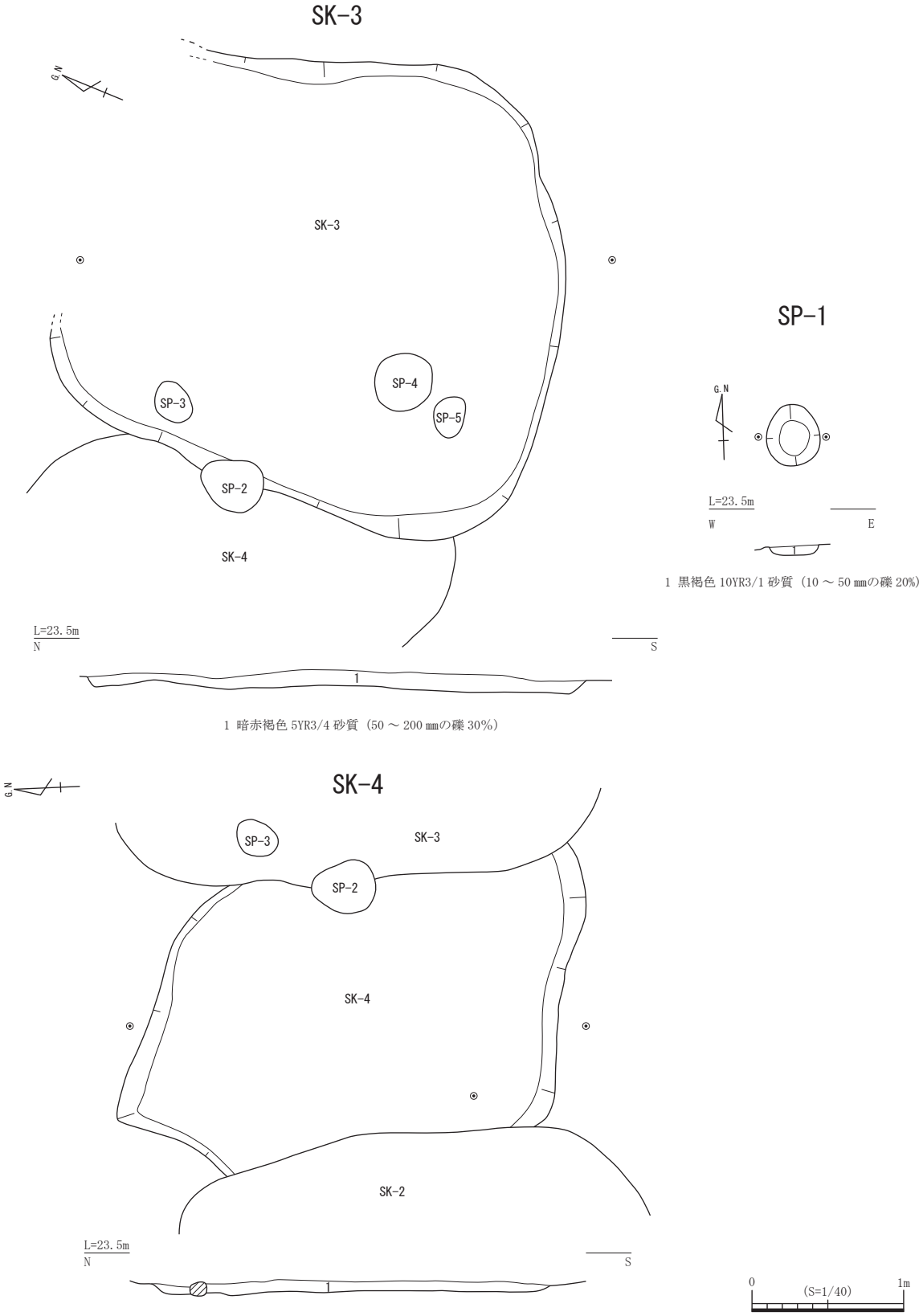


3g 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト
3h 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト（砂礫混じる）
3i 2.5Y5/2 暗灰黄色　砂礫混じり粘質土（円礫含む）

第５図　　南北基本土層図（1/４０）



第６図　　SD-1・SK-1・SK-2 平・断面図



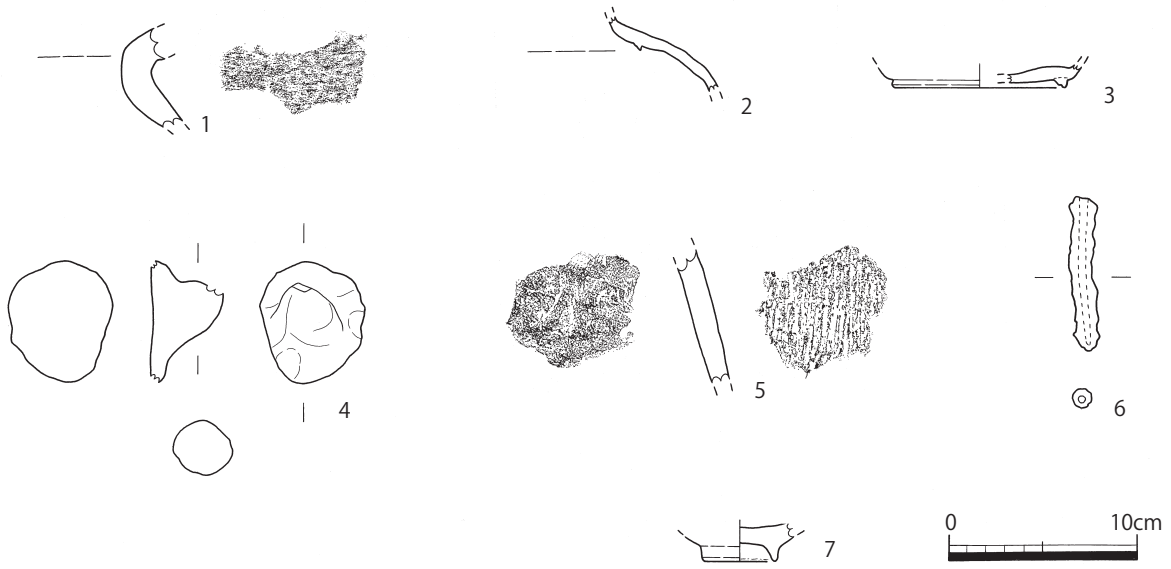
第 7 図　　SK-3・SK-4・SP-1 平・断面図

第３節　遺物（第８図）

今回の調査では遺構から出土した遺物はなく、遺構検出時や遺物包含層等から出土した。出土遺物は須恵器や土師器、釘等である。また、表採であるが、陶器片を採取した。

１は土師質土器の甕片である。出土場所は基本土層でいう４ｂ層の遺物包含層から出土した。時期は１４世紀末から１５世紀初頭と推定される（佐藤２０１６）。２は東西基本土層４ａ層から出土した遺物である。須恵器の高台付杯である。高台を回転糸切りした底部に貼り付けている。時期は底部からの立ち上がりが垂直に上がることや底部の規模、高台の形から８世紀後半から９世紀前半のものと考えられる（佐藤１９９３）。

その他の遺物は小片のため年代を特定できるものはなかった。



第８図　　遺物実測図

1)土器　　（　）は推定値、〔　〕は残存値

遺物番号	調査区	遺構	種類	器種	法量（cm）			文様・調整		色調	胎土	焼成
					口径	底径	器高	外面	内面	（上＝外面，下＝内面）		
1	A区	遺構面上面	土師質土器	甕			〔5.2〕	ナデ	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙 10YR7/4にぶい黄橙	普　3mm以下の長石・石英・赤色粒を含む	良
2	A区	黒褐色土（遺物包含層）覆土	須恵器	壺			〔3.9〕	回転ナデ	回転ナデ ナデ	7.5YR5/3にぶい褐 N7/0灰白	普　2mm以下の長石・石英・赤色粒を含む	良
3	A区	土層断面第3層（黒褐色土中）	須恵器	高台杯		(9.0)	〔1.2〕	回転ナデ	回転ナデ ヘラ調整	N6/0灰 N6/0灰	普　3mm以下の長石・石英・赤色粒を含む	良
4	B区	遺構検出時	土師器	甑			〔5.9〕	ナデ 指オサエ	ナデ	7.5YR7/6橙 10YR8/3浅黄橙	普　2mm以下の長石・石英・赤色粒を含む	良
5	B区	遺構検出時	須恵器	不明			〔7.0〕	平行叩き	ナデ	N6/0灰 N6/0灰	普　1mm以下の長石・石英を含む	良

2)鉄器

遺物番号	調査区	遺構	種類	法量（cm）		
				長さ	幅	厚さ
6	A区	黒褐色土（遺物包含層）覆土	釘	8.2	1.5	1.0

3)陶器

遺物番号	調査区	遺構	種類	器種	法量（cm）			文様・調整		色調			胎土
					口径	底径	器高	外面	内面	胎土	釉調	文様	
7	表採		陶器	底部		(3.8)	〔2.1〕	施釉 回転ヘラケズリ	施釉 回転ナデ	2.5Y7/3浅黄	透明		細

表１　出土遺物観察表

第４章　まとめ

今回の調査で古代以前の遺構を確認することができた。遺構から出土した遺物はないが、基本土層４a 層より８世紀後半から９世紀前半の遺物が出土し、香川県教育委員会による多肥平塚遺跡の調査においても同時期頃の遺構を確認していることから、同じ遺跡と推測される。しかし、遺構の密度は希薄で、多肥平塚遺跡の中でも希薄な部分と推定される。周辺の地形を見ると､調査区は周辺よりも低地で近くに旧河道が存在した可能性がある。香川県教育委員会の調査においても旧河道を検出していることから、多肥平塚遺跡周辺には何本もの旧河道が存在したと考えられ、これに接した微高地の縁辺部に当たると推測される。現に、調査区から出水と考えられる噴水地点が砂礫層部分で確認しており、現在も水脈が活きていると考えられる。

また、東西基本土層で地震が原因と考えられる噴礫の立ち上がりを確認した（図４のＡ層)。噴礫が起きる現象は地質学的に液状化しやすい条件さえ整えば、激しい地震動のもとで、粗い粒子を多く含む地層でも液状化が発生しうるとされる（寒川２００１)。噴礫は基本土層４a 層の上面で止まっており、９世紀以降から近世の間に発生した地震と推定される。この間における、南海地震等の大規模地震で史書に残る地震の発生は、８８７年の仁和地震（仁和３年７月３０日）（黒板１９７１)、１０９９年の康和地震（承徳３年正月２４日）（黒板２０００）等が挙げられる。これら以外にも史書で確認されない地震によるものの可能性が挙げられるが、このような大規模地震の発生により、噴礫作用が働いたものと考えられる。

引用・参考文献

大嶋和則１９９６『松林遺跡』高松市教育委員会

大嶋和則２００４『松林遺跡（第２次調査)』高松市教育委員会

大嶋和則２００６『多肥宮尻遺跡』高松市教育委員会

黒板勝美１９６６『国史大系 日本三代実録 後篇 』吉川弘文館

黒板勝美１９７３『日本紀略　後篇・百錬抄』吉川弘文館

佐藤竜馬１９９３「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『考古学論叢 : 関西大学考古学研究室開設四拾周年記念』関西大学考古学研究室

佐藤竜馬２０１６「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業（１）９世紀後葉～１１世紀前葉の供膳器種」『香川県埋蔵文化財センター年報平成２６年度』香川県埋蔵文化財センター

寒川旭２００１　「遺跡で検出された地震痕跡による古地震研究の成果」『活断層・古地震研究報告１』活断層研究センター

高橋学１９９２　「高松平野の地形環境 － 弘福寺領山田郡田図比定地付近の微地形環境を中心に － 」『讃岐国弘福寺領の調査 － 弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書』高松市教育委員会

山下平重１９９９　『多肥松林遺跡』香川県教育委員会

山下平重・蔵本晋司２０１３『多肥平塚遺跡』香川県教育委員会

写真図版

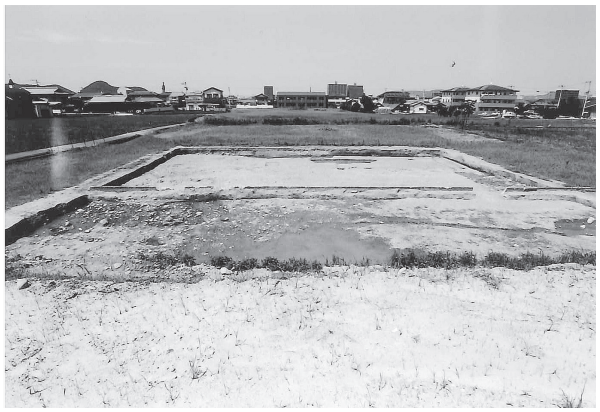
1　　基本土層東西面（南から）

2　　SD-1 土層断面（南から）

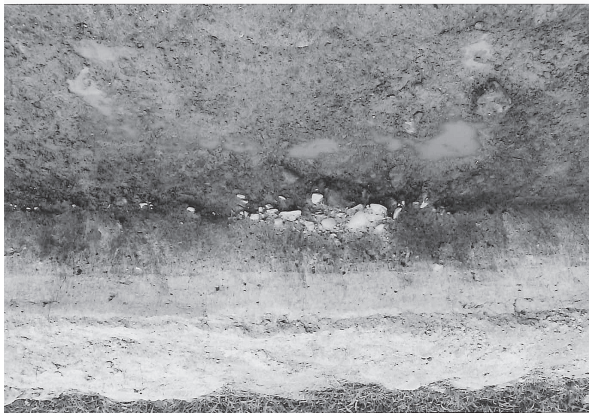
3　　SD-1 完掘状況（南から）

4　　SK-1 土層断面（北から）

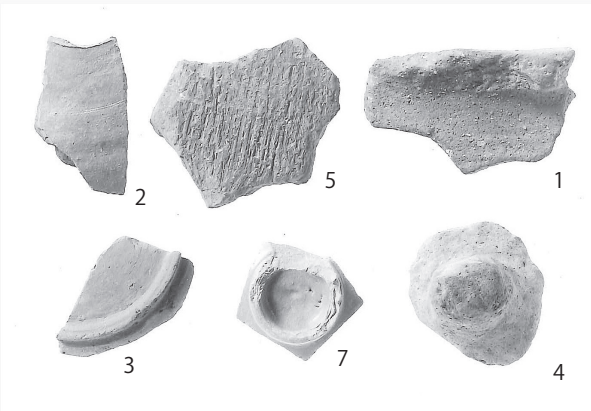
5　　SK-1 完掘状況（南から）



6　　調査区全景（南から）



7　　噴礫層確認状況（南から）



8　　出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	たひひらつかいせき
書名	多肥平塚遺跡
副書名	都市計画道路朝日町仏生山線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第１冊
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第１８０集
編著者名	香川　将慶
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目８番15号　　TEL087－839－2660
発行年月日	西暦2017年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘面積	発掘原因
多肥平塚遺跡（たひひらつかいせき）	香川県（かがわけん） 高松市（たかまつし） 多肥上町（たひかみまち）	37201		34° 17’ 44”	134° 03’ 02”	2016.6.14 ～ 2016.7.27	598㎡	道路建設工事

所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
多肥平塚遺跡	集落跡	古代	溝 土坑 ピット	須恵器 土師質土器	

要約	微高地の縁辺地にあたると推測され、調査区内で出水（ですい）と考えられる出水地が見られた。また、東西基本土層で9世紀以降から近世にかけての噴礫層を確認し、南海地震等の大規模地震が発生した痕跡と考えられる。

都市計画道路朝日町仏生山線整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

多肥平塚遺跡

平成 29 年 3 月 31 日

編 集 /発行　高松市教育委員会
高松市番町一丁目 8 番 15 号

印　　刷　有限会社 中央ファイリング